

教 育 研 究 業 績 書

2025年 5月 1日

氏名 上 戸 理 恵

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
1. 文学		日本文学	
2. ジェンダー		ジェンダー	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事 項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1)「卒業論文」の学生教育指導(卒業ゼミの運営)		平成23年4月～平成25年3月	青山学院女子短期大学で、卒業論文の作成を目的とするゼミを2年間担当した。卒業論文のテーマ選択、アウトラインの作成、口頭発表の実施、論文の添削指導等を行った。先行研究の整理を行った上で、ゼミ生同士のディスカッションを通じてそれらの見解についての批判検討を行い、発表者の作品読解についても討議を行った。また個人面談を実施し、各学生の進行に合わせた指導を行った。提出された卒業論文は一冊の論文集にまとめ製本し、年度末に学生に配布した。
2) 日本近現代文学に関する講義科目		平成23年4月～現在	青山学院女子短期大学で、日本文学や日本文化にかかわる講義を担当した。文学作品の読解を通じて、他者理解やコミュニケーションの問題、貧困や労働をめぐる問題、アイデンティティやジェンダー、セクシュアリティをめぐる問題を考察する枠組みを提示した。また、マンガやアニメなど現代日本のポップカルチャーを取り上げ、歴史的・社会的文脈からそれらの表象文化をとらえ直すことで、「読む」ことの創造性について追究した。これらの授業では各回のリアクションペーパー（学生のコメント）に、その次の回でフィードバックをし、面白い視点のものや重要な質問を全体で共有した。2023年4月からは、札幌大谷大学で「文学」の授業を担当し、「自己／他者」、「書き手／読み手」、「現実／虚構」の境界線を問い直すような作品を取り上げ、作者の意図に還元されるような作品理解を批判的に検討した。また、ジェンダーバイアスをはじめとする社会的なラベリングへの抵抗という要素を作品読解から導き出し、作品と社会との接点を探った。LMS導入後はグループワーク機能を活用し、各学生の解釈コメントを取り上げながら、複数の読みの可能性によって作品が新たな意味を持つことについても議論した。
3)「日本語表現」の学生教育指導		平成30年4月～現在	平成20年4月から平成23年3月まで北星学園大学、平成26年4月から平成29年8月まで東洋英和女学院大学で「日本語表現」の授業を担当し、初年次教育の一環としてのアカデミック・ライティングの基礎を身につけてもらうよう努めた。平成30年4月から北海道情報大学、2020年4月から北海道科学大学で、2022年4月から北星学園大学で、文章作成法にかかわる指導を担当した。オンデマンド教材や動画を作成・活用しながら、対面授業でもLMSのフォーラム機能を用いて双方向性を重視した授業運営を行った。2023年4月からは、札幌大谷大学で「文章構成法」、「文章要約実践」、「論理的文章作成実践」を担当し、レポート作成に活用するためのライティングスキルの課題実施とフィードバックの対応を行っている。

事 項	年月日	概 要
4) 札幌大谷大学社会学部 「論理的文章作成実践」(オムニバス科目)における基礎教育と専門教育との連携強化	2023年4月～現在	本学本学科の「論理的文章作成実践」の主担当として、論理的なアカデミック・ライティングの基礎について講義した上で演習課題の実施とフィードバックを行った。上戸が担当する前半では、大学での学びについて書かれた文献資料から、指定した方法・書式で引用する(書誌情報を記載する)ことを徹底した。後半は、3年次以降に演習(ゼミ)を担当する本学科教員にそれぞれの専門領域についての解説及び演習課題を実施していただいた。最終課題として、前半と後半をつなげる論述を行うというレポートテストを実施した。この科目を通じて、2年次から3年次に進級する際の、ゼミ選択及びコース選択への意識づけを強め、基礎的な学びの活用が3年次以降も必要となることへの理解を促した。
5) 札幌大谷大学社会学部 初年次教育に資する科目横断プログラムの構築及び実施	2024年4月～現在	本学の「初年次教育・情報リテラシー」(オムニバス科目)では、2024年以降、学科ごとに展開する7回目以降の主担当として、社会学部地域社会学科の初年次教育を設計(デザイン)した。「情報検索」と「基礎演習Ⅰ」とも連携して「1年前期の学びの基礎」を作っていくプログラムを提案・実施した。具体的には、①「社会課題の発見と議論の展開」、②「多面的な思考を身につけるための視点の獲得」、③「学んだことをインプットするスキルおよび自分で深く掘り下げてアウトプットするスキルの育成」という「初年次教育」の三本の柱を提示した。また、①「情報検索」で図書館を活用した蔵書検索の方法を学び、「基礎演習Ⅰ」で図書館実習を実施する、②「初年次教育」で作成した文章を「基礎演習Ⅰ」で丁寧にフィードバックする、など科目横断的なアカデミック・スキルを養成するプログラムを考案した。
2 作成した教科書、教材 1) 「(大学生のための日本語表現) 第5章第3節、第7章、第9章第3節、付録 参考資料(1)」	平成29年3月	レポート作成の実践に必要な日本語力を身につけることを目的としたテキスト(東洋英和女学院大学の「日本語表現」の授業で教科書使用)を分担執筆した。 第5章は「要約の力をつける」という単元である。第3節は、縮約文からさらに要点を整理するポイントを記載し、要約の演習課題を作成した。 第7章は「資料を分析し、文章化する」という単元である。対立する意見が書かれた2つの文章の要点を整理し、それぞれについて批判的に検討しながら自らの見解を示す演習問題を作成した。 第9章は「口頭発表をする・レポートや論文を書く」という単元である。第3節は、「アウトラインの作成」である。序論・本論・結論という基本的な構成法について示しつつ、アウトラインの実例を記述した。 「付録 参考資料(1)」は、「文献批評レポートの書式例」である。序論・本論・結論の基本構成や注のつけ方、出典の示し方、レポートにふさわしい文章表現を参照してもらうようなサンプルレポートを作成した。 編著者：上戸理恵、遠藤郁子、神田由美子、羽矢みずき、藤田和美、山田昭子、与那覇恵子 出版社：鼎書房
2) 『初年次教育ノート』の作成 (「初年次教育・情報リテラシー」の学科用副教材)	2025年4月	「初年次教育・情報リテラシー」の7回目に配布した。内容は、授業の教材(オンライン上のスライド資料等も含む)の確認の仕方、ノートテイク(パソコン・手書き)の方法とそのポイント、タイピングやパソコン操作の注意点、メールを送るときの作法、「不正」と判断されないような学修の方法、大学生活において必要となるチェックリストなど、1年次前期に必要な情報が中心となる。パソコンを使ったノートテイクについては、本教材を複数回活用し、理解の徹底を図った。

事 項	年月日	概 要
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 小樽文学館の企画展「雪の断章 佐々木丸美展」におけるトークイベントに登壇（トークタイトル「佐々木丸美作品における〈少女〉」）	平成21年2月	北海道当別町に生まれたミステリ作家・佐々木丸美の作品を、〈少女〉というテーマで多角的に読み解いた。1970年代に発表された佐々木の小説群と、同時代の少女漫画やポエム文化との関連性について言及した。また佐々木作品における少女表象が、少女小説に期待された役割をいかにはぐらかしているのかについて検討した。
2) 青山学院女子短期大学同窓会国文学科会文学講座「原爆ドームと文学Ⅱ 大庭みな子『浦島草』を中心に」（於青山学院女子短期大学）	平成27年7月	卒業生を対象とした青山学院女子短期大学国文学科会講座「文学で旅する世界遺産」の1回分を講師として担当した。 1970年代における原爆ドームには惨劇の記憶を伝えるという役割が期待されていたが、ドームの保存によってヒロシマが商品化され観光資源として消費されてしまうのではないかと懸念されていた。大庭みな子『浦島草』（1977年）は、原爆ドームに象徴されるヒロシマの商品化という問題を鋭く衝いた作品である。安易な商品化を回避する形で、ある惨事の記憶をどのように引き受けることができるのかという問題を『浦島草』を通じて考えた。
3) 青山学院女子短期大学同窓会国文学科会文学講座「モーパッサンの怪異——森茉莉による受容」（於青山学院女子短期大学）	平成28年11月	卒業生を対象とした青山学院女子短期大学国文学科会講座『『怪異』『幻想』『ファンタジー』の日本文学』の1回分を講師として担当した。 森茉莉は、1930年代前半に、モーパッサン (Guy de Maupassant, 1850 - 93) の「ル オルラ」(“Le Horla”, 1887)、「それが誰に分るのだ」(“Qui sait?”, 1890) をそれぞれ翻訳し発表している。この二作品はいずれも、超自然現象を目の当たりにした人物の語りによって構成されている。森茉莉が翻訳したモーパッサン作品、そしてモーパッサンに言及した小説「薔薇くひ姫」を手がかりに、森茉莉にとってモーパッサンを翻訳したという経験がどのようなものであったのかを考察した。
4) パネルディスカッション『『語る歴史、聞く歴史 オーラル・ヒストリーの現場から』をどう読むか』（於北海道大学）	平成30年11月	『語る歴史、聞く歴史 オーラル・ヒストリーの現場から』の著者・大門正克氏を招いて開催されたパネルディスカッションやシンポジウムに登壇者の一人として参加した。担当したのは、《文学の視点から》というセクションである。主に「女の語り」を物語化する実践を取り上げ、聞き書き／物語の境界を揺るがす大庭みな子の小説「犬屋敷の女」の紹介・分析を行った。
5) 研究発表「沈黙することと行動することの「あいだ」——木村紅美『あの子が石になるまえに』を読む」沖縄文学研究会（zoomによるオンライン開催）	2021年6月	沖縄を舞台に重層的な時空間を描く木村紅美『あの子が石になるまえに』（日刊『しんぶん赤旗』2020年3月6日～10月19日）を取り上げ、沖縄の痛みや記憶に〈現在〉の〈私たち〉はいかにアプローチすることができるのかを問う物語として読み解いた。沈黙と行動の「あいだ」を生きる主人公に現代の若者像を重ねると同時に、安易な決着を許さない禁欲的な作品の姿勢を指摘した。研究会には、作者の木村紅美氏も参加し、質疑応答を通じて貴重な話をうかがうことができた。
6) 研究発表「松田青子『持続可能な魂の利用』——〈革命〉をシミュレートする想像力の行方」新フェミニズム批評の会6月例会（zoomによるオンライン開催）	2021年6月	女性が置かれている抑圧的な「現在」の状況の打開を描いた女性作家の作品として、松田青子『持続可能な魂の利用』（中央公論新社、2020年5月）を取り上げた。「〈革命〉をシミュレートする想像力」という論点から、男性中心的な社会構造への批判と新しい「生」のあり方を追求した作品として読み解いた。

事 項	年月日	概 要		
7) 研究発表「谷崎由依『遠の眠りの』を読む」新フェミニズム批評の会12月例会 (zoomによるオンライン開催)	2021年12月	大正から昭和期を生きる地方の少女の姿を描いた谷崎由依『遠の眠りの』(集英社、2019年12月)を取り上げた。ヒロイン・絵子の〈移動〉(往還・逃亡)に着目し、成長物語への回収を拒むようなヒロインの造形を検討した。また、本作の読解を通じて、虚構の持つ限界と可能性について考察した。		
8) 研究発表「佐多稲子の初期作品における女性労働者表象について (1) 「キャラメル工場から」「お目見得」を中心に」 科研費プロジェクト「女性労働をめぐる運動と表現―戦間期日本のダイナミズムと連帯への模索に着目して」(22K12636) 合同研究会 (zoomによるオンライン開催)	2022年10月	佐多稲子の1920-30年代の作品群における女性労働の表象について考察した。佐多稲子の初期プロレタリア作品の特徴や系統を整理し、佐多の年譜的事項との関わりを示した。また、「キャラメル工場から」と「お目見得」の作中人物ひろ子の抑圧構造の二重性と非労働者的な位置づけを示し、「キャラメル工場から」の感傷的ロマンチズムを相対化する「お目見得」の批評性について明らかにした。		
9) 「名著読解講座第19回 山田昭子『吉屋信子 小説の枠を超えて』(春風社、2024)」(2024年度日本比較文学会北海道大会)	2025年3月	比較文学研究の文献をレビューし、ディスカッションを主導する「名著読解講座」を企画し、口頭発表を行った。吉屋信子の作品論を中心に、吉屋によるフランス語作品の日本語翻訳について新しい視座を提供した。		
5 その他				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事 項	年月日	概 要		
1 資格, 免許 1) 学校図書館司書教諭講習修了	平成13年12月	放送大学 13放第01959号		
2) 中学校教諭専修免許 (国語) 取得	平成19年8月	北海道教育委員会 平19高専修第29号		
3) 高等学校教諭専修免許 (国語) 取得	平成19年8月	北海道教育委員会 平19高専修第51号		
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 大庭みな子 響き合う言葉	共著	平成29年5月	めるくまーる	pp. 191～211 「『浦島草』における記憶と語り——原爆表象を中心に」(上戸担当章) 大庭みな子『浦島草』(講談社、1977年 3 月)は、戦後日本の時間・空間の記憶を重層的に表現した長編小説である。作中人物たちの記憶は一貫して不定形なものとして示されているが、本稿では、原爆の語りと記憶をめぐる困難とが作中でどのように表現されているのかを中心に検討した。なお、本書の刊行にあたり、大庭みな子研究会事務局として、原稿の依頼や取りまとめ、査読や校正などを担当した。 編著者：与那覇恵子 著者：大庭みな子研究会

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 2. 〈戦後文学〉の現在形	共著	2020年10月	平凡社	pp. 213～218 「大庭みな子『浦島草』(上戸担当章) 「戦後文学」というフレームの揺らぎを捉えながら、作品が呼び起こす問題を「現在」の時空へと接続させていくという意図で編まれた論集の解説文を執筆した。大庭みな子『浦島草』が、「原爆」の記憶と「原発」への欲望を地続きのものと表現していることを考察し、作品の現代性についても論じた。集合的記憶の中心をなすヒロシマの記憶を、個人的な欲望の物語として「現在」に継承していくことの可能性を指摘した。
3. 新・フェミニズム批評の会 創立 30 周年記念論集 〈パンデミック〉とフェミニズム	共著	2022年10月	翰林書房	編著者：紅野謙介・内藤千珠子・成田龍一 pp. 90-102 「松田青子『持続可能な魂の利用』論——革命をシミュレートする想像力の行方」(上戸担当章) 松田青子『持続可能な魂の利用』(中央公論新社、2020 年 5 月)が、既存の社会構造がもたらす閉塞感を打開する想像力の可能性を示した作品であることを論じた。女性アイドルという想像と現実の境界を揺るがす存在を媒介とし、女性同士が分断を乗り越えて連帯していく〈革命〉のあり方を考察した。〈いま・ここ〉にある世界とは異なる世界がいかに構築可能なのかを作品読解を通じて考察した。
4. 村田沙耶香 = Murata Sayaka (現代女性作家読本 21)	共著	2024年5月	鼎書房	編者：新・フェミニズム批評の会 pp. 128～131 「『丸の内魔法少女ミラクリーナ』——魔法少女として生き続けるということ——」(上戸担当章) 「丸の内魔法少女ミラクリーナ」(『小説 野生時代』2013 年 7 月)を、〈魔法〉と日常的現実とを並存させて生きていく処方箋を示した作品だと論じた。小学校三年生の時に始めた「魔法少女ごっこ」を、社会人となった現在でも続けているヒロイン・リナが、「魔法少女」の役割を略奪しようとする男性(リナの女友だちの彼氏・正志)を撃退し、女性たちが子どもの時から大切に守ってきた「遊び」を取り戻す。以上の点から、本作を従来の「魔法少女もの」を相対化するものとして評価した。
				編者：スペッキオ・アンナ

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 5. 現代女性文学論	共著	2024年12月	翰林書房	pp. 159～172 「谷崎由依『遠の眠りの』——〈行きつ戻りつ〉する者の物語」(上戸担当章) 大正から昭和期を生きる地方の少女の姿を描いた谷崎由依『遠の眠りの』(集英社、2019年12月)を取り上げ、ヒロイン・絵子の〈移動〉に着目し、「ビルドゥングス・ロマン」への回収を拒むようなヒロイン像について考察を試みた。戦間期の地方(福井県)が経験した産業構造の変化、文化興業(少女歌劇)の勃興と衰退が一人の少女の半生を通じて浮かび上がる。作品中では絵子の空間的な移動も社会的立場の上昇も直線的には進まず、〈行きつ戻りつ〉する。そのような往還のもどかしさにこそ、現代を生きる私たちが本作を読むことの意義があると論じた。 編者：新・フェミニズム批評の会編
6. 金原ひとみ = Kanehara Hitomi』(現代女性作家読本 22)	共著	2024年12月	鼎書房	pp. 110～113 「「ミーツ・ザ・ワールド」——目の前にいない存在に対する愛の讃歌」(上戸担当章) 『ミーツ・ザ・ワールド』(集英社、2022年1月)における、〈推し活〉を生活の中心に置く女性・三ツ橋由嘉里と希死念慮を隠さない美しいキャバ嬢・鹿野ライの関係性を分析し、「目の前にいない存在に対する愛」のあり方がどのように描き出されているのかを読み解いた。偶然出会ったライに導かれるように自らの交友関係を広げていった由嘉里は、ライの失踪をきっかけに自分と他者との関係について何度も問い直すこととなる。「家族」や「恋人」というかたち限定されない実在／非実在の他者との関わりを肯定していくことの可能性について論じた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 7. 労働をめぐるシスターフッド プロレタリア文学・フェミニズム・労働研究 (基盤研究C「女性労働をめぐる運動と表現—戦間期日本のダイナミズムと連帯への模索に着目して」(JSPS 科研費22K12636) の成果)	共著	2025年3月	北海道大学出版会	pp. 57～78 「第2章 佐多稲子：女性労働の空間におけるコミュニケーションへの着目」 1928(昭和3)年、佐多稲子は、小学生のときの実体験を素材とする「キャラメル工場から」を発表し、作家としてデビューを果たす。その後のプロレタリア作家としての佐多の歩みは、「キャラメル工場から」で示されたような小市民的な世界を前提とする「孤高」の少女という自己像を手放す過程でもあった。代わりに前景化していくのは、女性労働者たちが言葉や表情、仕草によって他者へと働きかける行為の多様な様相である。本章では、女性労働者同士の関わりやそれを媒介するコミュニケーション(特に言葉)の様態に着目して、女性たちの労働を描いた佐多の初期作品の独自性を探った。
(学術論文) 1. 森茉莉『恋人たちの森』論—パロディとしての〈同性愛〉表象	単著	平成16年2月	『藤女子大学国文学雑誌』(藤女子大学) 第70号 pp. 27～43	同時代において〈普遍的な恋愛〉という文脈で評価されていた森茉莉『恋人たちの森』(昭和36年)を、ジェンダー秩序に対する批判性を持つものとして読み替えることを試みた。作中の同性愛カップルの表象が、制度としての異性愛を相対化し、その虚構性を暴くパロディとして機能していることを論証した。さらに、〈主体／客体〉という非交換的な図式の中での〈客体〉へのこだわりが、この図式のヒエラルキーを転覆させている構造を指摘した。
2. 倉橋由美子『反悲劇』試論—「河口に死す」における〈近親愛〉	単著	平成17年12月	『研究論集』(北海道大学大学院文学研究科) 第5号 pp. 77～93	倉橋由美子『反悲劇』所収の短編小説「河口に死す」(昭和45年)における〈近親愛〉表象の両義性について検討した。神話の形で示される〈近親愛〉を立ち上げ相対化するという両義的な物語構造は、作中人物の「書く」という行為に結びつけられている。この小説において、「神話」がはぐらかされていく過程が、「神話」の模倣として家族の物語を書き記す高柳の行為とその挫折を通して示されることを読み解いた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 3. 大庭みな子『母の夢』試論——「欲望の代行」をめぐる物語	単著	平成19年5月	『日本近代文学会北海道支部会報』(日本近代文学会北海道支部) 第10号 pp. 42～58	大庭みな子『母の夢』(昭和46年)の考察を通して、大庭作品における「欲望の代行」の構造を読み解いた。交代する語りを見ていく中で、この小説における夫婦の共依存関係がいかなる力学のもとに構築されているのかを考察した。先行研究において女性の欲望の物語として位置づけられてきた『母の夢』を、妻が夫の欲望を代行する物語として読み直すことで、家族内のジェンダー役割がどのように構築されているかという仕掛けを明らかにした。
4. 断片のテキスト／テキストの断片——森茉莉「薔薇くひ姫」試論——	単著	平成22年7月	『国語国文研究』(北海道大学国語国文学会) 第138号 pp. 36～49	森茉莉「薔薇くひ姫」(昭和51年)を、「現前する世界」の代理／表象から遠ざかっていく小説として取り上げ、作品を作家の実体験や考えを代表するものとして位置づける文学観の相対化を試みた。書いている「私」についての自己言及性や、本筋／脱線の階層性を攪乱する構成の特徴に着目し、それが作中の挿話とアナロジカルな関係にあることを明らかにした。これらの作業を通じて、従来の森茉莉文学の評価軸を問い直す視角を示した。
5. 「やおい」・「ボーイズラブ」(BL) 研究における森茉莉評価の再検討——「月の光の下で」論	単著	2021年8月	『国語国文研究』(北海道大学国語国文学会) 第157号 pp. 31～44	森茉莉の発表した男性同性愛小説「月の光の下で」(昭和41年)を、やおい・ボーイズラブ(女性によって読み書きされる物語ジャンル)に特徴的な、所与の物語における友情関係を恋愛へと読み替えていく二次創作性が強く表れている作品として考察した。また、本作における「演技」的空間の横溢が、これまで森茉莉が描いてきたロマネスク小説の世界観を相対化するパロディとして機能していることを指摘した。
6. 佐多稲子「お目見得」論——労働とジェンダーの主題に着目して	単著	2024年3月	『札幌大谷大学社会学部論集』 第12号 pp. 34～46	佐多稲子の作家としての出発期において、労働や生活に織り込まれたジェンダーやセクシュアリティの問題に着眼して女性たちの現実を描きだそうとする試みが模索されていたことを検討した。デビュー作「キャラメル工場から」(1928)の続編として限定的にしか言及されてこなかった作品である「お目見得」(1928)において、女性の「性」を商品としてまなざす空間がどのように表現されているのかを考察し、作中で〈健全〉な場として設定されたはずの中華そば屋において〈客の相手〉という口実で性的サービスと一般的な接客の境界が曖昧になっていく構造を明らかにした。 (本研究は JSPS 科研費 22K12636 の助成による研究成果の一部である)

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(書評) 1. 書評 小平麻衣子著『なぞること、切り裂くこと：虚構のジェンダー』	単著	2023年11月	『日本近代文学』 (=Modern Japanese literary studies) 日本近代文学会編集委員会編 109 集 pp. 244～247	小平麻衣子著『なぞること、切り裂くこと：虚構のジェンダー』を、個々人がジェンダーという制度を現実化するありようを「文学における〈書きかえ〉」と重ねて解明した研究として紹介した。本書は、明治期末から戦後（一九五〇年代）までを射程とし、女性表現を中心に上げている。本書全体を概観し、発表時においては看過されていたような無名の書き手への着眼している研究上の意義を指摘した。一方で、〈書きかえ〉が分析概念として前景化していない章もあり、問題の枠組みが共通している章とそうでない章が混在している点を指摘したが、このような問題点を批判する以上に、「なぞり書きをくり返すうちにインクがにじみ、ペン先が手本の紙を切り裂く」というモデルで〈書きかえ〉という営為をすくい上げた点を評価すべきであるという結論を導いた。
(その他) (口頭発表) 1. 森茉莉「月の光の下で」とアルトゥル・シュニッツラー『恋愛三昧』——読み換え／書き換えの欲望	単独	平成25年10月	日本近代文学会 秋季大会（於関西大学）	森茉莉「月の光の下で」（昭和41年）を、アルトゥル・シュニッツラー『恋愛三昧』の受容という観点から検討した。父親である森鷗外の翻訳を通じて『恋愛三昧』を読んでいた森茉莉が、そこに描かれた男性たちの「友情」という関係性を「恋愛」へと読み換えていったということを論証した。また、「月の光の下で」における「演技」の横溢が、純愛のコードをずらし、これまで森茉莉が描いてきたロマネスク小説の世界観を相対化するパロディとして機能していることを指摘した。
2. 大庭みな子『浦島草』における記憶と語り——原爆表象を中心に	単独	平成26年10月	日本近代文学会 秋季大会（於広島大学）	大庭みな子『浦島草』における原爆の語りと記憶をめぐる困難とがどのように関連しているのかを検討した。本作において原爆の記憶といかに対峙するかという問題は、当事者の「語り」を含めた言語による応酬と不可分に結びつけられている。「人間の理解をはるかに超えた体験」である原爆を表象する言葉の限界を前提としながら「作り話」として位置づけられた語りがどのような強度を持ちうるのかを分析した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) (口頭発表) 3. ワークショップ 《女性作家、その葛藤の痕跡——言語・文化・ジェンダー》	共同	平成29年7月	比較文学会北海道大会 (於 北海道教育大学旭川校)	「大庭みな子『海にゆらぐ糸』における「ゆらぎ」—アラスカ再訪という体験— 移動と越境をめぐる女性作家たちの作品群を取り上げたワークショップで、大庭みな子作品を取り上げて報告した。 大庭みな子が11年間を過ごしたアラスカへの回想と再訪を描いた作品集『海にゆらぐ糸』において、記憶や存在の「ゆらぎ」がどのように描かれているのかを考察した。〈再訪〉という体験がこの「ゆらぎ」と不可分に結びついていることを示しながら、作中においてアラスカという土地の持つ異種混雑性がどのように機能しているのかを検討した。また、作中に描かれた越境性とコミュニケーションの問題をジェンダーやナショナル・アイデンティティの視点から分析した。
4. 佐多稲子の初期作品における労働とジェンダー——「キャラメル工場から」「お目見得」を中心に	単独	2023年3月	日本近代文学会北海道支部例会	佐多稲子の1920-30年代の作品群における労働とジェンダーの問題系を考察するにあたり、「キャラメル工場から」とその続編である「お目見得」で、作中人物ひろ子に対する語り手に「変化」が見られることに着目し分析を行った。男性に対する女性たちの媚態が商品化される（一方で、女性同士は競争に駆り立てられ連帯を阻まれる）構造を鋭く切り取った「お目見得」の語り手が、少女小説におけるジェンダー規範（施しの美化・無垢な純粋性）を相対化していることを指摘した。 (本研究はJSPS科研費22K12636の助成による成果である)
5. 「大庭みな子『赤い満月』論——手紙が生成する物語」	単独	2024年7月	日本文学協会 第43回研究発表大会(於北星学園大学)	大庭みな子の短編小説「赤い満月」では、「わたし」と親戚男性「一さん」との長い交流が、「一さん」の手紙を引用する形で示されている。メタフィクショナルな機能を果たす手紙の引用や「わたし」による語りは、「一さん」を小説の書き手として浮上させ、文学に惹かれる血族の物語を生成する。一方で、「一さん」のモデルとなった人物の書簡資料を照応することで、他者(死者)の言葉を断片化して利用する「わたし」が浮かび上がる。本作の考察を通じて、「書くこと」を巡る倫理性を追究する視座を示した。